

『それから』の表現に現れた代助の思考の特徴

—大胆な決断を可能にしたもの—

李 種恩・柳澤 浩哉

1. 本稿の問題意識

『それから』は、裕福な家庭に育ち高等教育を受けたにもかかわらず、社会に出ることなく「高等遊民」を続ける代助が、親友平岡の妻三千代を奪い取るまでの物語である。

石原千秋氏は、『それから』を代助と家との関係から読み直すユニークな論文の中で、従来の『それから』の読みを次のようにまとめている。「全き恋によってのみ回復されるものとしての遅すぎた近代自我的覚醒の物語」¹⁾。さらに、この固定的な読みが見落としてきた問題として次を指摘する。

読者は、近代的自我的覚醒の美名のもとに、本来働きであるはずの自我を実態化し、代助の自我の統一がどのような感性や論理の枠組みによって組織化された結果なのかを問うことを怠って来たばかりでなく（後略）

氏の論文では、代助が依拠する「論理の枠組み」として、明治民法を背景とする家の論理が提示されている。本稿は、石原氏と同様の問題意識に立ちながら、代助の「感性や論理の枠組み」として、全く異なるレベルにおける枠組みを提示してみたい。

それは代助の思考の特徴（思考傾向）である。家の論理を外的要因とすれば、これは代助の内的要因であり、さらに論理よりも感性と深くかかわる枠組みと言えるだろう。そして、三千代の略奪という大胆な決断、ラストで予兆なくやってくるパニックなど、物語の要所において、この内的要因が主要な動因として機能していることを明らかにしたい。

2. 本稿の方法と概要

作品の読みに影響を与える表現上の特徴を発見すること。『それから』の表現分析を行うにあたり、本稿ではこれを目標に設定した。小説の表現に何らかの特徴を見つけることは必ずしも難しくないが、読みに影響を与える特徴となると話は別である。表現を構築する要素から何が読み取れるのか。そのための方法がいまだ確立していないからである。

ただし、この領域でも方法が全く存在しないわけではない。その一つは作者の意図や計算をあぶり出す方法で、ここでは西洋修辞学で行われてきた、叙述方法の研究、いわゆる修辞技法の研究、文法形式と表現効果の関係などの研究が役に立つ。もう一つは、話者や書き手の思考の特徴を推測するもので、例えば、否定や接続詞などの選択から話者の思考傾向を明らかにした先行研究には優れたもの

がある。また、語彙の選択に何らかの傾向を見出し、そこから思考の枠組みや精神状態を推測する方法は、文学研究において広く行われている。

我々は『それから』を対象に、ここにあげた要素を広く調査したが、残念ながら、作品の読みに影響を与える特徴の発見には至らなかった。

次に注目したのは、アメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーのトポス研究である（ここでのトポスは立論形式を類型化したもの）。彼の主張は立論形式の好みと思想傾向の間に対応関係があるという興味深いものである²⁾。主人公の内面が詳しく語られる漱石作品では、立論形式が有効な切り口になり得ると期待したが、『それから』の立論に特別な傾向を発見することはできなかった。

我々は注目する要素の範囲をさらに広げ、最終的に、二者択一という推論形式が多用されていることを見出した。さらに、推論の内容面、すなわち推論のデータを調べてみると、代助に過去のデータを参照しない傾向があることも明らかになった（ただし、後述するように、データ選択については作品の後半部分で大きな変化が見られる）。

本稿の結論を先取りすると次のようになる。まず、代助には推論において過去のデータを参照しない特徴がある。だが、物語の後半部において、この特徴は三千代の関与をきっかけに百八十度変化する。「いずれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さないことはなかつた」という衝撃的な事実を発見したからであり、代助はそれ以降、自分と三千代との過去を何より重視するようになる。その

一方で、二つの選択肢にこだわる思考傾向は最後まで変わらない。

三千代の略奪という重大な決断を下す際、この二つの特徴が重要な動因として働く。すなわち、父の勧める縁談か三千代かという二項対立を設定し、そこに二人の過去を組み合わせ、三千代の略奪という結論を導き出したのである。ただし、思考の特質にリードされる形で獲得した結論は、強さと脆弱さを併せ持つことになる。三千代を奪うまでの代助の強さとラストのパニックは、そこに大きな原因があると考えられる。

3. 代助の思考の特徴(1):二者択一

代助の推論形式の特徴から考えてみたい。代助には二つの選択肢を提示した上で思考を進める傾向がある。(1)は金の無心を兄に断られた代助が、兄の動機を推測している箇所である。下線部に二つの選択肢がある（引用に付した下線は全て筆者による）。

(1) そんなら自分が今茲で平岡の為に判を押して、連借でもしたら、何うするだらう。矢つ張り彼の時の様に奇麗に片付けて呉れるだらうか。兄は其所迄考へてゐて、断わつたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初から安心して貸さないのかしらん。（6章）

ここでは二つのポイントが見出せる。第一は選択肢の数である。(1)では二つの可能性（下線部）があげられているが、兄の動機はこの二つの外に、例えば、自分にあえて厳しくした、金の要る理由が納

得できなかった、といった可能性をいくらかでも想像できる。つまり、三つ以上の選択肢が簡単に提示できる場面でありながら、代助は選択肢の数をあえて二つに限定していることになる。

第二のポイントは思考の中断である。(1)では二つの選択肢をあげたものの、どちらも選んではない。そして、この問題(兄の動機)はこの引用の後、一切語られなくなってしまう。つまり、二つの選択肢を提示しただけで思考が終わってしまうのだ。代助には、二つの選択肢の提示が、結論以上に重要であるようにも見える。

(1)に見られた特徴は、代助の思考においてしばしば繰り返される。彼は、二つの選択肢を立てるのが好きで、それだけで満足してしまう。これは彼の思考の特徴(思考傾向)と言っていいたいだろう。類例をあげてみたい。(2)は、花器の水を飲んでしまった三千代を見て、その動機を考えるくだりである。代助を尋ねてきた三千代は、代助が水を用意させている間に、鈴蘭の生けてあった花器の水を飲んでしまう。

(2) 代助は黙って椅子へ腰を卸した。果して詩の為に鉢の水を呑んだのか、又は生理上の作用に促がされて飲んだのか、追窮する勇氣も出なかつた。よし前者とした所で、詩を銜つて、小説の真似なぞをした受売の所作とは認められなかつたからである。そこで、たゞ、「気分はもう好くなりましたか」と聞いた。(10章)

水を飲んだ動機について考えたものの、

本人にそれを確認する気にはならなかったという場面である。つまり、動機を明らかにする意志は必ずしも強くないのに、二つの選択肢をあげたことになる。選択肢をあげずにはいられない、あるいは思わずあげてしまうということだろう。

(3)は文筆で生計を立てている寺尾と会食した日の晩、自分が文筆で生きていけるか、自問する場面である。自分に寺尾のような生き方のできないことが、代助には最初から明らかなはずなのに、二つの選択肢が提示されている。

(3) 代助は其晩自分の前途をひどく気に掛けた。もし父から物質的に供給の道を鎖された時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑つた。もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたなら、彼は当然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。(15章)

結論が決まっても二つの選択肢をあげずにはいられないのだろう。(二つの選択肢は、代助が「疑つた」ことの具体的内容と考えて間違いあるまい)。

もう一つ例をあげてみよう。(4)は、代助に金を工面してもらったにもかかわらず、少しも引け目を見せない平岡について考えるくだりである。

(4) 代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が、些ともそんな顔をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に振

舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か、又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか、何方かに帰着する。(8章)

「何方かに帰着する」と言っていることから、二つの選択肢が一方しか選べない関係(二分法)であると自覚していることが分かる。だが、いずれの選択肢も選ばれることなく、選択肢の提示だけで考察が終わる。

『それから』では、同様の特徴を持った考察を多数観察することができる、ただし、二者択一は漱石作品一般に見られる傾向ではない。前期三部作に見られる二者択一を数えると次のようになる。

『三四郎』 10

『それから』 36

『門』 9

また、類例を並べる場合でも『それから』では二つに留める場合が多く、これが17例見られる(三つ以上の類例の列举は9)。これに対して、『三四郎』と『門』における類例の列举は、ほとんどが三つ以上である。類例の列举でも『それから』では二という数にこだわっていることが分かる。

4. 代助の思考の特徴(2): データ選択の偏り

二者択一は推論形式における特徴である。ここではデータ、すなわち推論の内容面に注目したい。(5)には二者択一を見出すことができるが、ここではデータの使い方に注目してみたい。

(5) 代助はもう一返嫂に相談して、此間

の金を調達する工面をして見やうかと思つた。又三千代に逢つて、もう少し立ち入つた事情を委しく聞いて見やうかと思つた。

けれども、平岡へ行つた所で、三千代が無暗に洗ひ浚い饒舌り散らす女ではなし、よしんば何うして、そんな金がかかる様になつたかの事情を、詳しく聞き得たにした所で、夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる訳のものではない。(7章)

代助と平岡は昔からの親友で、三千代を平岡に斡旋したのは代助である。さらに、平岡の借金が部下の使い込みの穴埋めのためだったことを、代助は平岡から直接聞いている。つまり、代助は平岡夫婦の経済状態や夫婦関係を推測する手がかりを数多く持っていたことになるが、彼は三千代の性格を考えるものの、三千代や平岡の記憶を思い起こすことも、平岡の話を確認することもしない。代助は過去を推論の手がかりに使わないのである。

(6) は、三千代が代助の家を二回目に訪れた時の会話である。この時、三千代は百合の花を持参している。三千代が兄と清水町に住んでいた時、代助が百合の花を持って来たことがあったからである。さらに、彼女は代助と初めて出会った時の髪型である銀杏返を結っていた。

(6)「此花は何うしたんです。買て来たんですか」と聞いた。三千代は黙つて首肯いた。さうして、「好い香でせう」と云つて、自分の鼻を、瓣の傍迄持つて来て、ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を真直に踏ん張つて、身を後の

方へ反らした。

「さう傍で嗅いぢや不可ない」

「あら何故」

「何故つて理由もないんだが、不可ない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顔をもとの位地に戻した。

「貴方、此花、御嫌なの？」

代助は椅子の足を斜に立てゝ、身体を後へ伸した儘、答へをせずに、微笑して見せた。

「ぢや、買つて来なくつても好かつたのに。詰らないわ、回り路をして。御負に雨に降られ損なつて、息を切らして」

(中略)

「貴方だつて、鼻を着けて嗅いで入らしたぢやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した。(10章)

三千代の努力にもかかわらず、代助は百合にも銀杏返しにも全く反応しない。それどころか、「貴方だつて、鼻を着けて嗅いで入らしたぢやありませんか」と水を向けられても、彼は「そんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した」というだけで、その場面を思い出そうとしない。

三年前の代助が、実際にどの程度三千代を愛していたかについては疑問の余地があるものの、彼女が気になる存在であったことは間違いないだろう³⁾。だが、彼は三千代とのエピソードをすっかり忘れ、それに対する興味も失っていることが分かる。

過去を推論のデータに使わないこと、

過去を忘れてしまうこと、過去に興味を感じないこと、これらの背景には共通の価値観が想定できる。彼は過去に価値を感じないのである。

5. 過去に対する価値観の逆転

三千代は、そんな代助に二人の過去を思い起こさせる役割を持っている。代助の家を訪問する時、常に彼女が過去を想起させるアイテムを身に付けていたことは、それが意識的に行われていた可能性を示唆する⁴⁾。先ほどの(6)における百合と髪型はそのアイテムの一つである。次の(7)は、代助の家を最初に訪れた時の彼女の様子である。

(7) 廊下伝ひに坐敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛けた。さうして綺麗な手を膝の上に置ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛つた当世風のもので、三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。(4章)

指輪の位置関係が、代助に対する三千代の気持ちを表現していることは言うまでもないが、代助が指輪に全く反応しなかったため、三千代の努力は空振りに終わる。なお、下線部では同一の形が繰り返されている(反復法)。反復法はそれだけでも目を引くが、ここでは全く同じ形の反復が、ぎこちない印象を生んで一層目立たせる(反復法で全く同じ形が繰り返される必要はない)。これは指輪の位置関係をより印象付ける効果を生むだろう。

(7) は一度目の訪問、前節に引用した(6) は二度目の訪問である。三千代は過去を想起させるアイテムを身に付けて代助を二度訪ねたものの、彼は三千代との過去を思い出さないばかりか、過去に興味を示す気配すら見せない。だが、あるきっかけによって代助は三千代との過去に重大な意味を発見する。皮肉なことに、それは彼女の訪問でもアイテムでもなく、彼女への同情と慈しみであった。

代助が何度目かに彼女の家を訪問した時、彼女は父親から届いた手紙を見せる(平岡は不在である)。三千代の父は株で失敗して全財産を失い、北海道で苦しい生活が続けている。手紙には父の貧窮した哀れな様子が綴られていた(この手紙は平岡にも見せていない)。代助が読み終えた時、「三千代は眼の中に涙を溜め」、血の気が失せて青白くなる。その直後、彼は互いの強い気持ちを次のように実感する。

(8) 其時代助は三千代と差向で、より長く坐つてゐる事の危険に、始めて気が付いた。自然の情合から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼等を駆つて、準縄の埒を踏み超えさせるのは、今二三分の裡にあつた。(13章)

だが、彼は「今一步と云ふ際どい所で、踏み留ま」り平岡宅を後にする。そして歩きながら二人の関係を徐々にさかのぼり、とうとう次の事実を発見する。

(9) 代助は二人の過去を順次に溯ぼつて見て、いづれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつ

た。(13章)

短く書かれているが、「いづれの断面にも」「燃る愛の炎」という強い言葉、「見出さない事はなかった」という二重否定による強調(緩叙法)がこの発見を印象づけている。途切れることのない「燃る愛の炎」の発見は、それ自体十分に衝撃的だが、過去に価値を認めなかった代助にとって、この発見は一層大きな意味を持つだろう。これ以上ない重大な事実を、過去が突きつけてきたのだから。この発見は過去に対する彼の価値観を根底から変える。(9)には次が続く。

(10) 必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の為に、足がふらついた。

(中略)

それから二日程代助は全く外出しなかつた。(13章)

「三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だ」という過去に対する解釈は、代助の足をふらつかせ、二日間家に閉じ込めたという。これ以降、代助は二人の過去に何より大きな価値を置くようになる。

三千代を自宅に呼んで決定的な告白をする際、代助は沢山の白百合を部屋に生けて次のように言う。「兄さんと貴方と清水町にゐた時分の事を思ひ出さうと思つて、成るべく沢山買つて来ました」。さらに、三千代の銀杏返しも覚えてっていると言い、「僕は、あの時も今も、少しも違つ

てみやしないのです」と答えた後、次の決定的な告白をするのである。

- (11)「僕が存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。僕は夫丈の事を貴方に話したい為にわざ／＼貴方と呼んだのです」(14章)

6. 代助の決断のプロセス

ただし、代助は「燃る愛の炎」を発見しても、三千代の略奪を簡単に決断した訳ではない。最初に考えたのは、「平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便りに、自分を三千代から永く振り放」(13章)することである。彼は新聞社に平岡を訪ねて三千代との関係修復を求めるが、この試みは失敗に終わる。その後、彼は次のように考える。

- (12) 此所で彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との関係を、直線的に自然の命ずる通り発展させるか、又は全然其反対に出で、何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は、偽に始つて、偽に終るより外に道はない。悉く社会的に安全であつて、悉く自己に対して無能無力である。と考へた。(13章)

三千代の略奪を「自然の命ずる通り」に、父の勧める縁談を「全然其反対」に置き換えて、二つを対立する選択肢と捉えているが、父の勧める縁談と三千代の略奪では、社会的意味が全く違う。両者は比較などできない関係にあるはずだが、二

者択一という思考傾向が、この二つを対立する選択肢に見せてしまうのだろう。

もう一つ注目すべきは、「何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しい」と考えていることである。代助には選択肢を並べるだけで満足してしまう傾向があったが、この問題では保留も、「其他のあらゆる中途半端の方法」も許されないと強く自覚する。だが、彼には結論を出すことができない。

ただし、二つの選択肢を選択不能なヂレンマと考えるのは、彼の信念に反することになる。彼の信念を簡単に確認してみよう。それは、妥協や偽りを含んだ生き方を嫌い、真面目で誠実に生きるというシンプルなものである。彼の考える「誠実」は、平岡に自分の職業観を語る次の言葉に端的に表現されている。

- (13)「つまり食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪いと云ふ意味さ」(6章)

職業から「食ふ為め」という要素を排除するのは不可能なのだが、代助はそこに妥協や不誠実を感じて働けないのである。だとすれば、彼は(12)の二つの選択肢の間で立ち止まる必要はないだろう。彼の信念である「誠実」に合致するのが「自然の命ずる通り」なのは明らかだからである。彼はこれまで自分の信念を振りがざし、食うために働く平岡に冷やかな目を向けてきた。だが、その信念がどの程度のものではあったか、このヂレンマは図らずも暴露したことになる。これは例えば次の(14)でも確認できる。

- (14) 自然の児にならうか、又意志の人に

ならうかと代助は迷った。彼は彼の主義として、弾力性のない硬張つた方針の下に、寒暑にさへすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。同様に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達して居る事を切に自覚した。(14章)

ここではそれぞれの選択肢に伴う困難が検討され、「彼の主義」が嫌う結婚は「自己を、器械の様に束縛するの愚」、三千代の選択は「生活が、一大断案を受くべき危機」と書かれている。抽象的な前者と、大げさな口調の後者を比べると、後者の方が明らかに切実である。三千代という選択肢が、思考を進める中で遠ざかっていたことが分かる。

意外なことに、この傾向は美千代の略奪を決意する直前まで変わらない。最終決断の直前においても代助は次のように考えている。

(15) 縁談を断る方は単独にも何篇となく決定が出来た。たゞ断つた後、其反動として、自分をまともに三千代の上に浴せかけねば已まぬ必然の勢力が来るに違ないと考へると、其所に至つて、又恐ろしくなつた。(14章)

略奪に対する恐怖が語られているが、それを押し返せる原理や情熱を、この前後に見つけることはできない。このまま決断できずに終わってしまうことを予想させる流れである。

だが、この直後、代助はこの困難な問題に突然決着をつけてしまう。それを語った部分を引用しよう。

(16) 一番仕舞に、結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼしさうもないと云ふのが、段々代助の脳裏に勢力を得て来た。既に平岡に嫁いだ三千代に対して、こんな関係が起り得るならば、此上自分に既婚者の資格を与へたからと云つて、同様の関係が続かない訳には行かない。それを続かないと見るのはたゞ表向の沙汰で、心を束縛する事の出来ない形式は、いくら重ねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。代助は縁談を断るより外に道はなくなつた。(14章)

ここに語られた「代助の論法」を注意深く読むと、困難な決断を選び取れた背景が見えてくる。

その第一は、現実、すなわち略奪がもたらす結果を全く見なくなったことである。現実から目を背ければ、結果に恐怖することはない。

第二は、推論が二者択一という思考傾向に沿って行われていることである。ここでは、二つの選択肢が「道德の形式」と「道德の内容」という同一平面上の対立に置き換えられている。二つの選択肢は全く次元の異なるものだが、二つを同一平面上の対立に置き換えたことで、対等の重みを持った選択肢のように見える。

第三の背景は、もう一つの思考傾向、すなわち過去の事実を推論の根拠に使ったことである。具体的には、「平岡に嫁いだ三千代に対して、こんな関係が起り得る」ことを根拠に、自分が別の女性と結婚した場合の未来を、「同様の関係(筆者

注：三千代と代助の関係）が続かない訳には行かない」と強く予想する。

第二と第三の背景を比べると、選択肢の設定よりも過去の事実の方が重要に見えるかもしれない。だが、(16)で展開されている推論が、二項対立の組み合わせによって作られていることに注意して欲しい。この論理は次の三つの二項対立によって展開している。

「道徳の形式」vs「道徳の内容」

「平岡に嫁いだ三千代」の場合 vs 「自分に既婚者の資格を与えた」場合

「続かない」と見える「表向」vs「苦痛を増す許」の内面

二項対立は二者択一の前提である。最後の決断において、二者択一という思考傾向も重要な役目を果たしていたことが確認できる。

(16)のポイントをまとめると次のようになる。三千代の略奪という大胆な結論に到達できたのは、現実から目を背けて自分の思考傾向に従ったからである。

代助は、父の勧める結婚か三千代かという選択肢の間で身動きが取れなくなり、三千代の略奪はむしろ遠のきつつあった。だが、最後に彼は〈自然な〉自分と向き合うことでこの問題に決着をつけることができた。ただし、〈自然な〉自分とは、彼が価値を置いてきた「自然」や「誠実」ではなく、自分自身の思考傾向に従うことであった。乗り越えられない困難な状況の中で、現実から目を背け、自分の好む論理によってこの問題に決着をつけたのである⁵⁾。自分の思考傾向に沿った推論は自然で心地よく、そこから導か

れる結論は強く納得できるものとなるだろう。

7. ラストの急変の背景

略奪を決意した翌々日、代助は三千代に自分の気持ちを伝え、さらにその五日後、平岡に会って三千代を譲って欲しいと告げる。三千代の略奪が恐ろしい結果を招くことを、代助はもちろん承知しているが、彼に迷ったり怯えたりする様子は少しも見られない。この姿勢は平岡との談判の場でも変わらず、平岡に対して彼は堂々とした態度を崩さない。さらに、平岡の手紙を持参した兄に詰問されても、代助は心の中で次のように考える。

(17) 代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此焰の風に早く己を焼き尽すのを、此上もない本望とした。(17章)

しかし、兄が家を去った後、「角野さん。僕は一寸職業を探して来る」と言って炎天の中を歩き始めると、彼は体が焼けるように感じる。「彼はぢり〜と焦る心持がした。」そして電車に乗ると、「彼の頭は電車の速力を以て回転し」始め、「赤い郵便筒が眼に付いた」ことをきっかけに、「世の中が真赤」になり「代助の頭を中心としてくるり〜と焰の息を吹いて回転」していく。それまでの硬い信念がラストで突然崩れ、パニックに陥ってしまうのである。

この節で確認した代助の強さと突然のパニックは、彼の決断の必然的結果と考えることができる。自分の思考傾向に沿った決断は自然で納得できるものだから、自ずと強いものになるだろう。その

反面、現実から目を背けて導かれた結論が、現実の圧倒的な重みに抗することは難しい。職探しに象徴される現実の厳しさを実感したとたん、彼の支えは一瞬で破壊され、パニックに陥ったと考えられる。

代助は、高い教養と鋭い思考力を持つ反面、世間知らずでプライドが高く、独特の信念を持ち、さらに特殊な思考傾向を持つ人物として造形されている。興味深いのは、彼の思考傾向が物語の要所で重要な動因として機能していることである。思考傾向は個性の中でも表に出にくい要素だから、意識的に行わない限り、これが物語を動かす主要因となることはないだろう。シミュレーションや実験に近い意識を持って、漱石が『それから』を書いたと思えてならない。

他の漱石作品でも、代助に匹敵する、個性的な思考傾向や感性を主人公が持っている可能性は高いと思われる。その解明を今後の課題としたい。

注

- 1) 石原千秋『反転する漱石』、1998年、筑摩書房、p.206
- 2) Weaver, M. Richard, "Language is Sermonic", 1962 (Reprinted in Richard L. Johansen ed. *Contemporary Theories of Rhetoric : Selected Reading* (New York, 1971)
- 3) 「燃る愛の炎」は現在の代助が考えたことであり、三年前の代助がこの言葉通りではなかったことを、石原千秋氏が主張している(石原前掲書、pp.222-236)。氏は複数の語句を根拠にこれを主張しているが、本稿では平岡に三千

代を斡旋した時、代助が平岡の前で泣いた事実を重視したい。代助は美千代を平岡に斡旋したのではなく棄てたのだ、という可能性が成立しても(この解釈は石原氏以前にも指摘がある)、三千代が気になる存在でなければ、この場面で代助が泣くことはないと思われるからである。

- 4) 『それから』において三千代が恋の主役だったことを最初に主張したのは次の論文であり、その中でも(7)の箇所が重視されている。齊藤英雄「「真珠の指輪」の意味と役割—『それから』の世界—」(『日本近代文学』第29集、1982年10月)
- 5) これが現実逃避であることは言うまでもなく、そこに退行を見出すことも可能なはずである。

使用テキスト

『漱石全集 第四巻』(岩波書店、1966年)

謝辞 査読で多数の貴重なコメントをいただきました。査読いただいた先生方に衷心より感謝いたします。

李 種恩(広島大学大学院生)

柳澤 浩哉(広島大学)